

## 「記憶の境界」からみる沖縄のいま

エドワード・ボイル

二〇二二年五月十五日

二〇二二年五月十五日、沖縄は日本の統治下に復帰して五〇年を迎え、宜野湾市の沖縄コンベンションセンターではこれを祝う公式記念式典が開催された。天皇、皇后両陛下が東京からリモート出席されたこの式典は、テレビやインターネットでも広く放映された。三時間以上に及ぶ式典の第一部は、天皇陛下のおことば、岸田首相、玉城沖縄県知事の式辞といった要人の挨拶が主で、第二部では、琉球王朝の宮廷儀礼から空手の実演まで、沖縄文化が広く紹介された。そして会場内で交わされる琉球語、かりゆしシャツ、(天皇陛下も着けられていた) ミンサー織ネクタイなど、沖縄の文化を象徴する要素も式典全体を通じて見て取れた。

ここでいう沖縄とは、必ずしも現在の沖縄県に限定されるものではない。式典の最後に流れたビデオで世界中から沖縄の踊りが届けられたことがそれを示唆する。世界中で暮らす、沖縄にかかわり、むすびついてきた人々の姿が沖縄を体現しているものである。沖縄の伝統は、県境はおろか、日本の国境をも超えて広がる。だが復帰五〇周年式典は、こうした世界的な文脈にある「沖縄」を日本というナショナルな枠組みに押し込めようとしているのではないかと私は感じた。

五月十五日の式典は、単にその「日本復帰」を祝ったものではない。私がかねがね考える「記

憶の境界」を引くためのイベントであったように思う。「記憶の境界」とは、人びとが地域でかわってきたさまざまなレベルの記憶を境界付け、その記憶が空間のなかで再構成されるプロセスを分析するボーダースタディーズ（境界研究）のアプローチの一つである。同じ事象であっても、誰がどこからの時間と空間を切り取って文脈化するかで、差異化された記憶の物語が新たに紡がれる。私はこのアプローチを使って、いまの沖縄がもつ「記憶」の意味を少し考えてみたい。

### 「固有の領土」としての沖縄

最初に断っておかねばならないのは、沖縄がそもそも一つではないということだろう。米軍による「鉄の暴風」を体験したのは、主として沖縄本島である。八重山、宮古は（いやその島々においてさえ）第二次世界大戦をめぐる異なる体験をしている。例えば、「マラリア戦争」を経験した石垣の住民たちは本島における日本軍の「蛮行」を共有するが、台湾と親しかった与那国の人たちにその記憶はない。「沖縄」という言葉でその伝統的な慣行や慣習、衣装（実際には多様なのだが）を一つに折り畳み、東京からの演出で式典に仕立てるといふ行為は、沖縄を単色化するとともに、日本の「固有の文化」の一部としてこれを祝福しようとしている。「固有の」という表現は、領土の係争に関わり、近年、日本の政府やメディアが北方領土、竹島、尖閣諸島に対して多用するものだが、広い意味でいえば、沖縄そのものにもあてはまる。

振り返れば、戦後間もない頃、何よりも返還が望まれていた「固有の領土」とは、一九七二年までアメリカの統治下にあった沖縄であった。沖縄復帰は「戦後の終わり」のシンボルであると同時に、近代日本が形成されるときに「固有の領土」として引き受けた島々の領有に対す

る再確認でもあった。一九七二年に日本に施政権が返還された尖閣諸島のみならず、「沖繩」そのものに対しても中国と台湾がこれを日本の領土とすることに潜在的に疑義を表明し続けていることに留意しよう。五月一四日午前、中国海警局の船四隻があたかも式典に警告を発するかのよう、日本の領海に侵入したことも記憶に新しい。

岩下明裕（北海道大学）、河龍出（ワシントン大学）とともに編集した近刊、『*Geo-Politics in Northeast Asia* (Routledge, 2022)』で、私たちは次のような考察をしている。近年、北東アジア地域で海をめぐる紛争が目立つようになったのは、国連海洋法条約（UNCLOS）の施行により、海での「囲い込み」が始まったことに起因する。いま各国は海域をフロンティアととらえ、（広い意味で）自国の「領土の一部」と考え、権利の主張・管理を積極化している。だが、海に「固有の」という形容詞をつけることは難しい。そこでどの国も歴史を利用して、海を取るための起点となる島々を「我が国が先に所有していた」なる神話を創り、自国の記憶空間、つまり博物館などを通じてこれを宣伝している。国際法的にはあまり説得力はないのだが、古い歴史をもてばもつほど、島々の「固有性」を主張でき、海への権利もアピールできるとみな信じ込んでいる。

### 消された歴史

興味深いことだが、今回の沖縄の日本復帰記念式典では、このように過去の紐帯を強調する旧来の歴史利用とは違う手法が用いられた。確かに文化に焦点を当てた第二部では、沖縄の人々の慣習の歴史性が強調され、これらのルーツが琉球王朝であり、戦前から発展していたことも紹介された。他方で、「沖縄」そのものについては過去に触れない演出で彩られ、沖縄復帰

の経緯を語るビデオ映像は、沖縄戦直後のまちの荒廃から始まり、一九四五年以前に遡るシーンはない。重きが置かれたのは、沖縄都市モノレールの開通（那覇、二〇〇三年）、那覇空港の二本目の滑走路供用開始（二〇二〇年）など一連の開発プロジェクトによる、復帰後の沖縄県の劇的な変化——すなわち東京の支配下でのインフラ整備の発展とまちの成長であった。挨拶やスピーチでも、日本復帰後に沖縄が得た物質的な利益が強調された。

このインフラ重視の演出は、中央政府の政策や「開発主義者」たちの思惑だけでなく、他の日本国民が沖縄をどう見ているかの反映でもあろう。つまり、沖縄県民以外にとって、那覇空港の二本目の滑走路やモノレールこそが現地の最初の接点であり、復帰後の沖縄との「つながり」なのだ。かくしてこのように現在の状態を重視するやり方は、歴史に目をつぶることをも意味する。沖縄独自の文化を重んじる姿勢や隣国と紛争の火種になっている島の領有を歴史でアピールする立場と対照的といえよう。要するに、復帰記念式典は、日本にとってのいまの沖縄の意味を見事に凝縮したイベントであった。

一九四五年以前の沖縄の歴史に触れないことで、琉球王朝と明治政府、いやそれ以前の本土との関係をめぐるデリケートな論争は回避される。メディアなどで、沖縄の人々の文化が歴史を遡って語られることはよくあるが、これを「日本としての沖縄」として真正面から議論されることはあまりない。これをやれば、日本にとっての沖縄の「固有性」が当然ながら疑われるからだ。

いわば、消された歴史とでもいえるこの点について、式典では玉城知事らから、批判的なコメントも寄せられた。米軍施設の沖縄への過度な集中、復帰から五〇年たっても経済・社会の面での沖縄の「後進性」などがそれだ。とはいえ、復帰以降の発展にもかかわらず、沖縄には

まだまだ注視すべき問題が残っているという認識として、これをとらえれば、天皇陛下のおことばや岸田首相の挨拶とさほど異なるものではない。大事な点は歴史ではなく、日本と沖縄が力を合わせて歴史を克服するというメッセージが、共有されていることだろう。奇妙なことに、メディアでは対立に力点が置かれがちな、首相と知事のメッセージも実は同じ方向を向いている。いわば、両者とも一九四五年以前の沖縄の政治とその責任を棚上げにしている。

### 「首里城」の変貌

復帰記念式典から読み取れる「記憶の境界」は、沖縄の現代と文化が出合う別の場所でも見ることができる。首里城がそうだ。琉球王朝の政治の中心舞台であった首里城は沖縄戦で完全に破壊され、米統治下の時期には琉球大学が置かれていた。その再建は一九八六年に発表され、一九九二年に正殿や北殿が完了したが、これもいわば戦後の終わりを告げる国家プロジェクトの一つといえた。この再建については「何の相談もなく、(内地からの)観光客向け」と住民たちからかなりの反対が寄せられた。二〇〇〇年にユネスコの世界遺産に登録されたものの(ただし、あくまで首里城跡であり、再建された城は含まれず)、二〇一九年一月三十一日の火災で焼失すると、城の再建と文化的価値の復元を求める声が直ちに高まった。

二〇二一年三月、ビクトリア・ヤング(ケンブリッジ大学)、ラン・ツイゲンバーク(ペンシルバニア州立大学)、そして私は首里城について *Heritage from the margins? Shuri Castle and the Politics of Memory* という会議を開催したが、この会議の議論においても、沖縄復帰記念式典で見られたような歴史と文化をめぐる曖昧さが散見された。参加者たちの打ち明け話によれば、一九八〇年代の首里城再建運動と異なり二〇一九年の火災ではこれを嘆く声が溢れ返り、地元

の人たちが、「沖繩の象徴」たる首里城に感情的に入れ込む様子に驚いたという。首里城といまの沖繩の人々の感情を説明するには、沖繩の過去の歴史に焦点を当てる必要がある。にもかかわらず、例えば今回の式典で、二〇二六年末に再建が完了すると述べた岸田首相のスピーチでは、日本と沖繩の歴史は触れられず、沖繩の文化遺産に対する日本政府の支援が強調されたのみであった。

結局、世界遺産の登録プロセスとは何だったのだろう。要は、文化への物質的な支援が日本の一部としての沖繩を際立たせ、これを世界に普遍的なものとしてアピールしようとしていた。この歴史を捨象した物語の創造は、沖繩の観光を含めた経済発展にも寄与した。翻って、首里城の視点から眺めれば、沖繩に関わる「記憶の境界」が見えてくる。これは単に沖繩対日本と二分できる枠組みではない。新たな歴史が生み出されていくプロセスともいえる。

一度出来上がったシンボルはそれ自身、独自の意味を持ち始める。戦後に再建された首里城が、その後、沖繩の人々に戦前の歴史を想起させたように、新たな城の再建は、分断された文化と歴史を再びつなぎ合わせ、地域の未来を切り開くシンボルとなる可能性を有する。文化遺産の空間をめぐる「記憶の境界」は、互いに対立や無関心であった異なるコミュニティ間のつながりを再建することにもなろう。城の焼失を受け、これらコミュニティ間の関係が変化し、刷新された象徴空間が生まれることを通じて、つながりもまた再創造される。

本稿で述べた、復帰五〇周年記念式典と首里城再建計画は、歴史の遺産や記憶に対する祝祭空間がどのような機能を持ち、どう社会と結びつくのかを読み解く貴重な素材である。「記憶の境界」という手法は、過去から未来への流れる事象への気づきとともに、沖繩に私たちがどのように向き合うべきかの示唆をも与えてくれる。

\*執筆にあたり、東京大学史料編纂所特任研究員サイフマン・トラビス氏、北海道大学公共政策大学院准教授池炫周直美氏、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授岩下明裕氏にお世話になりました。

（国際日本文化研究センター准教授）